

麻痺のある患者さんの在宅ケア

(2023年2月)

1. はじめに

脳腫瘍によって運動の障害のある患者さんは、自分の思い通りに動けなかったり転びやすかったり、さらには言葉が喋りにくくなったり、食事を飲み込みにくくなったりすることがあります。患者さんとそのご家族や介護に携わる方が、より安心して在宅療養が行えるよう、麻痺のある患者さんの在宅ケアについて説明します。

脳の機能が障害されて動作ができないということは、生活ができないということと同じではありません。別の方法を見つけることや、機能を助ける方法によって、生活の質を維持できることがありますので、医療スタッフに相談してみましょう。このパンフレットを利用することで、患者さんとご家族・介護者のみなさんがより良い在宅療養ができるようになることを願っています。

2. 運動麻痺とは

大脳の運動を司る中枢から筋肉に至るまでの神経自体や神経路の障害により、思うように体を動かす事ができなくなった状態をいいます。障害される部位によって動かなくなる部位や症状に特徴があります。腕や足に全く力が入らなくなる完全麻痺から、一部に力が入らなくなるような部分麻痺まで症状は様々です。また感覚の機能が障害されて、手足の位置覚や深部感覚が障害されると、普段は意識しない、手足が曲がっていることや筋肉の伸張などがわからなくなり、手足に力がいっても歩けなくなることや、細かい運動ができなくなることもあります。脳腫瘍では、脳腫瘍の発生した部位や腫瘍が大きくなることで正常な神経組織が圧迫されて症状がでます。または手術などの影響によって生じる事もあります。

1. 麻痺による具体的な症状

- 足の麻痺では歩くことが難しくなる場合があります。足に力が入らなくなる事によってバランスを崩したり、足を上げたり、前に運んだりすることが難しくなる事があります。
- 腕や手指の麻痺では、腕が動かなくなる事によって物を持ったり、掴んだり、運んだりという動作が困難になる事があります。
- 顔や舌の筋肉の麻痺では、言葉が上手く話せなくなる、食べ物や飲み物が上手く飲み込めなくなるなどの症状が生じる場合があります。

2. 麻痺がある患者さん、ご家族に注意してもらいたいこと

- 無理をしない事が大切です。
- 手足の麻痺だけでなく、感覚も障害されている場合があります。体の下敷きにならないようにする事や、熱い物、冷たい物などが近くにある時には注意が必要です。

(1) 足の麻痺がある場合

- 麻痺によって転倒しやすくなります。歩行時の方向転換や、わずかな段差にも注意が必要です。普段歩く経路の障害物（コード類、じゅうたん）を無くすようにしましょう。
- 立ち上がりや座るときにバランスを崩してしまう場合がありますので注意しましょう。
- くしゃみや、あくびといった動作においても容易にバランスを崩してしまう可能性があります。花粉症などのアレルギーがある方は、マスクなどの予防策をとるようにしましょう。バランスを崩しそうな場合にはイスに座ったり、何かを持つなどの対策を行う事で転倒のリスクを低くすることができます。

(2) 腕や手の麻痺がある場合

- 物を持つ事や掴む事が難しくなります。食事などは、滑り止めを敷くことや、持ちやすいスプーンやフォーク等の器具や介護用品を使用したりする事で、障害の影響を少なくする事ができる場合があります。
- 腕に力が全く入らない場合には、腕の重さを支えきれなくなり脱臼して痛みがでる場合があります。こうした場合には三角巾等を使用し腕を持ち上げておくことで脱臼やそれに伴う痛みを防ぐことができます。寝ている時には枕などを腕の下に置いて楽な姿勢をとるようにすると痛みの予防になる事があります。

3. 麻痺がある患者さんとご家族に行って欲しいこと

- 相談できる環境を作ってください。自分達だけで様々な問題を解決するには限界があります。様々な社会資源を利用して、相談員、専門職のスタッフ、訪問看護師さん、訪問リハビリセラピストに、日常生活で困っていることや、自宅での過ごし方について相談して生活を見直していく事が大切です。
- 生活様式を和式から洋式にすることを検討してみてください。
- 布団からベッド、座布団から椅子、和式トイレから洋式トイレのように、出来る範囲で生活様式を洋式にする事で障害の影響を少なくする事ができます。こちらに関しては、購入だけでなく、レンタルなども可能な物があります。

- 自宅にある段差などの危険性のある場所を把握しましょう。
- トイレや浴室など、座ることや、立つこと、衣類の着脱が必要な場所については、専用の椅子や手すりの設置を検討して、同じ方法で行えるように調整することで動作がしやすくなります。
- 麻痺となった部位をそのままにしておくと麻痺がさらに低下したり、関節などが硬くなったりして、痛みがでることがあります。こうした場合、更衣などの生活動作に悪影響が出てしまう事があるため、一日一回は曲げ伸ばしの訓練を取り入れていきましょう。曲げ伸ばしに抵抗が強い場合には、お風呂上りなど温めた状態で行うとしやすくなる事があります。
- 歩けない場合でも、車いすに移れる場合には、車いすに積極的に移乗していく事が大切です。その際は、正しく楽な座り方ができるように相談しましょう。
- 歩けなくなると、自宅に引きこもりがちですが、できるだけ外にでて、気分転換とりハビリを続けましょう。
- 利き腕の麻痺が生じた場合には、介護用品などの器具を利用したり、利き手の交換（左手をつかう）も含めて相談をしてみましょう。
- 患者さんは自分自身の障害の程度に気付かない場合もあります。ご家族からみて、急に物を落とすようになったり、身体が傾くようになってきたなど、ご家族の視点や協力によって早期に対応ができる事がありますので、そのようなことに気づいた場合には医療スタッフに相談しましょう。
- 麻痺によって、これまでできていた事ができなくなってしまう事が考えられます。しかし、方法や環境を工夫する事で、日常生活や趣味、外出できるようになる場合があります。家族の方も含めて、友人や仲間との時間を引き続きもつようにしていきましょう。

編集・発行

JSNO 特定非営利活動法人日本脳腫瘍学会 <https://www.jsn-o.com/>

〒181-8611 東京都三鷹市新川 6-20-2 杏林大学医学部内

TEL : 0422-47-5511 (内線 4546) E-mail : jsno@jsn-o.com

作成者 日本脳腫瘍学会 脳腫瘍支持療法委員会

池本 智義 (順心神戸病院)

川合 茜 (社会医療法人 医仁会 中村記念病院)

櫻田 香 (山形大学医学部 看護学科・基礎看護学講座)

野村 恵子 (NPO 法人脳腫瘍ネットワーク (JBTA))

百田 武司 (日本赤十字広島看護大学)

成田 善孝 (国立がん研究センター中央病院 脳脊髄腫瘍科)

発行日 2023年2月1日

本パンフレットの内容については、必ず医師・看護師など医療者の説明を聞いてご使用ください。
無断で本パンフレットの内容を複製・転載することを禁じます。